

## 日系人の高齢者施設における介護の現状

### ブラジル・サンパウロ州、あけぼのホームから

渡邊 薫

## The Present Condition of Nursing Home Care for Japanese Immigrants

### A Report from Akebono Home, Sao Paulo State, BRAZIL

WATANABE, Kaoru

#### はじめに

2003年7月より約2ヶ月間、学外研修の機会を得て、ブラジル・サンパウロ州内の日系人高齢者の状況について調査を行った。また、静岡県内、特に浜松市には多くのブラジル日系人が生活している。浜松市調査結果によると、2002年には、外国人登録者数21,434人のうち、ブラジル国籍の外国人は12,712人となっている(資料:浜松市市民窓口センター集計)。これらの人々の滞在の長期化(『ブラジル人と国際化する地域社会』p27)に伴い、ブラジルに残された家族の高齢化、介護の担い手についての課題が取り上げられるようになった。筆者は、1998年に3ヶ月間、日系人の高齢者施設にボランティアとして活動した経験を持つ。そこでの経験を踏まえ、現在の日系人高齢者の状況と、更に介護の状況を「あけぼのホーム」を事例として紹介したい。また、今後の方向性を探るための材料としたいと考えた。

#### 1. サンパウロ日伯援護協会と日系人社会

まず、「あけぼのホーム」を紹介するにあたり、経営母体である「サンパウロ日伯援護協会」について説明をする。この協会は1959年に設立された。その設立目的は日本人の相互扶助であり、日本から渡伯してみたものの身寄りが無く、入植地の決まらない日系移民に対する宿泊施設から始まり、やむを得ず日本に帰国する人々のための宿泊施設が設置された。文化言語の違いなどによりブラジルになじめずに精神疾患を患った人々のための治療回復施設、結核療養所、診療所、奥地への巡回診療、総合病院、老人ホーム、そして特別

養護老人ホームなど、ブラジルに移住した人々の生活状況に応じてその運営内容をしだいに拡大している。これらの窓口として福祉部を置き、福祉、生活全般についての相談援助を行っている。南米一の規模を誇る日系人相互扶助組織である。なお、その組織は会員によって構成され、会員の会費によって運営されている。しかし、出稼ぎ人口の増加による会員の高齢化と、新規会員の獲得が今日の課題であろう。

ブラジル国内の平均寿命は IBGE 調査（資料：ブラジル地理統計資料院）2002 年の調査によると 71 歳である。なお、1991 年の調査では 60 歳以上の人口が 7.3%であるのに対して、2000 年には 8.6%となっており、この 10 年間に 1.3%の上昇率となっている。現在のブラジル国内においても高齢化率の上昇は社会的な政策課題とされている。しかし、ブラジルの国内状況を静観してみれば、貧富の差（1999 年国連の調査によると、世界一所得格差が激しい国であるとの報告がある。『ブラジルを知るための 55 章』p 162）の改善など早急の課題は数多く、高齢化対策は次なる課題と捉えられていると考える。

さて、日系人の多くはサンパウロ州とパラナ州に在住し（『ブラジル日本移民八十年史』移民 80 年祭典委員会・ブラジル日本文化協会編著 p 257）、その多くがサンパウロ州に在住している。さらに、サンパウロの中心部リベルダーデ地区（東洋人街）には日系人の高齢者が数多く暮らしている。移住船「にっぽん丸」が 1973 年に最後の集団移住民を乗せてサントス港に入港してから（集団移住は日本の移民政策として、1908 年から 1973 年まで行われた）2004 年の今年で 31 年が経過しており、日本で生まれ、ブラジルで生活する一世の人々の高齢化も進んでいる。

なお、サンパウロ日伯援護協会調査の『ブラジル日系社会高齢者実態調査』によると、低所得の高齢者世帯などは医療保険への加入料が高額であることへの不満など、生活に不安を訴える人も多い。その反面、高所得の人々は、自宅で看護師や家政婦を雇い看護や介護を行っている。それらの人々も、日本からの NHK 衛星放送による高齢者福祉や介護に対する情報により、介護の社会的整備を望んでいることがこの調査より解る。

## 2. 「あけぼのホーム」と入所者の特徴

「あけぼのホーム」は、1999 年に開設された高齢者のための介護施設である（日本国内では特別養護老人ホームに相当し、ブラジル日系人の間でも同じく呼ばれている）。JICA を通し日本政府の援助により建設された。日系人社会の高齢化により、介護の必要性が現実的な問題と捉えられたためと考える。「あけぼのホーム」はサンパウロ州グウルーリョス郡にあり、同じく援護協会の精神障害者社会復帰センター「やすらぎホーム」に隣接している。施設、建物の状況（1 号館、2 号館、管理棟）を説明する。（図 . 1）東西に両翼を広げた形の平屋造り（管理棟一部 2 階建て）他にコテージが 8 家屋設置されている。現在は 1 号棟と 2 号棟のみ入居しており、コテージは職員の住居として利用されている。設計者は、地下鉄の駅など公共性の高い建築物を手掛けた著名な設計士が起用された。開設当初は、1 号館のみであったが、2002 年には 2 号館が完成した。総敷地は、24,000 平方メートル、建築延べ面積は 2,602 平方メートルである。1 号館と 2 号館の間は長い廊下でつなが

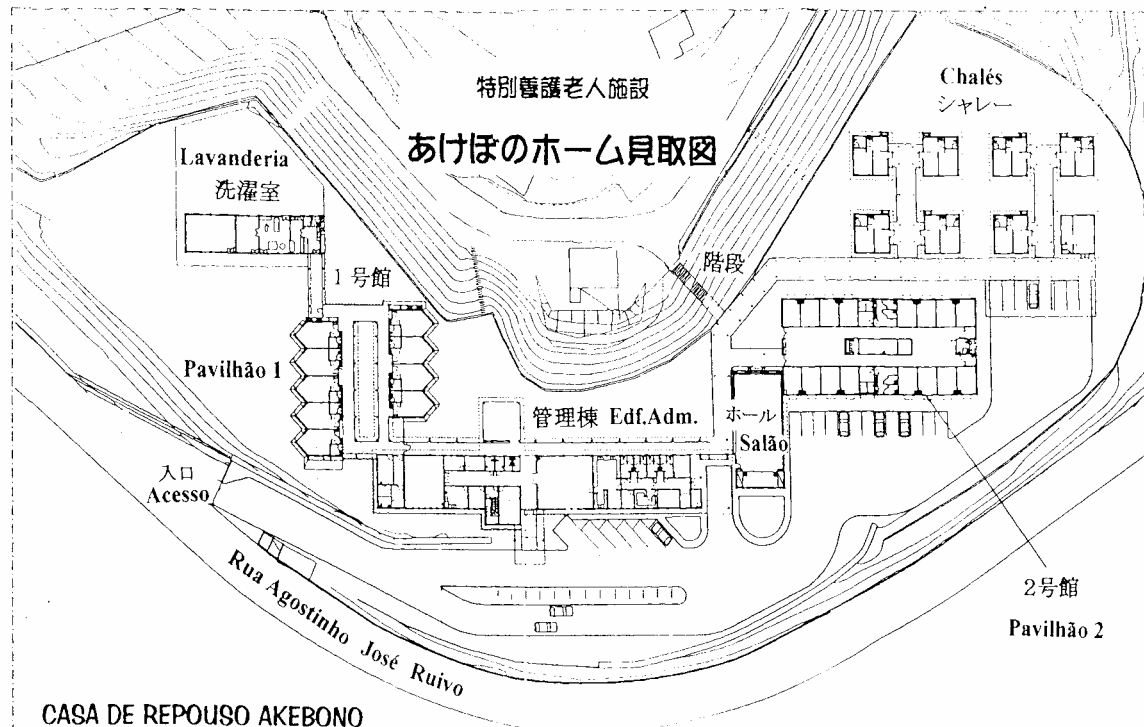


図.1 あけぼのホーム提供「あけぼのホーム見取り図」

っており、実際に業務を体験したところ、面積が広いために動線が長く、勤務時間を考え合わせると、職員の体力も過重負担であると感じた。

入所者数は2003年7月現在、36名。そのうち男性は16名、女性は20名である。2002年度の報告書によると平均入所者数33名、平均年齢は80.9歳（男82.0、女80.2）最高年齢95歳（男女共）であった。なお、1居室の入居者数は、1号棟は1から3名、2号棟は1から2名である。

日本国籍保持者が29名、ブラジル国籍が4名である。その内、戦前移民（第2次世界大戦前）は19名、戦後移民は9名、不明が1名である。

家族との関係は、面会簿によると、2003年6月は延べ207名、7月には189名の面会数があった。7月の入所数が36名であるので、1名あたりの、月の延べ面会人数は5.25人になる。ブラジルの生活習慣の特徴として、週末、両親の元へ集まることの現われか、そこから見えてくるものは、家族との繋がりを保つ関係が持続しているのではないかと思われる。

1ヶ月の基本的な利用料はR\$1,740（ブラジル通貨＝レアル）である。それに、薬代などの医療費が加わり平均すると、R\$2,000が必要である。ブラジル政府が定めた1ヶ月の最低給料（最低賃金）がRS240であることを考えると高額である。しかし、実際のブラジル社会においては、前記したように所得の差が激しいため、この利用料が高いのか、安いのかを判断しにくいと考える。実際に、2003年7月の一人当たりの入所費平均支払い額はRS1403.47であり、その差額を補うため、サンパウロ援護協会福祉部から援助（扶助）が行われている。なお、運営のための公的援助は受けていない。（『2002年度・事業及び決算

報告書』サンパウロ日伯援護協会)また、この入所費用に関しては、先の調査(『ブラジル日系社会高齢者実態調査』サンパウロ日伯援護協会)にも「老人ホームの入園費用が高い・・・」という回答が寄せられている。

入所者の言語は、主に日本語を話すのが、ブラジルでの生活が長期にわたるため、ポルトガル語での会話は殆どの場合不自由がない。しかし、日系一世の高齢者は殖民地での労働時代より長い期間、日本人社会を形成しその中で生活した歴史を持っている。日本語が馴染みの言語となっており日本語での会話を求めることは、自然な傾向と考える。

一日の過ごし方は、食事、入浴(ブラジル保健省:「老人ホーム老人病院等高齢者を対象とする施設の運営基準」により浴槽の設置は許されていないため、入浴はシャワーである)

写真.1: 参考資料(イペランジャ・ホームの浴室内)



午前、午後のカフェ、リハビリなどを行い過ごしている。朝食は、パンとコーヒー牛乳、果物。午前10時頃と午後の3時頃に「カフェ」の時間があり朝食とほぼ同じ内容の物、砂糖を加えた「マテ茶」や、砂糖を加えたコーヒー牛乳を飲んでいた。その後11時には昼食の時間となり、揚げ物、サラダ、主食のご飯(インディカ米とジャポニカ米の2釜が用意される)、ブラジルの郷土料理フェイジョアード(黒豆と豚肉の煮込み)が用意される。煮物などの日本的な食事も用意され、それぞれの好みに合うようにされている。

入浴、リハビリの時間以外は、車椅子などに座って、日本語の衛星放送(NHK・BS放送)が放映されており、テレビの周りに集まっていた。入

所者同士の会話や、介護職員からの語りかけについては、筆者の調査中については数回見かけるだけであった。

文化、行事については、毎月の誕生会、地域日系人の祭り、施設の祭り(盆踊り)、フェスタ・ジュニーナ(農村部のお祭り)、母の日、父の日(ブラジルは8月に行われる)、ナタール(クリスマス)などの行事が行われている。フェスタ・ジュニーナは初夏に行われるブラジル農村部の子どもたちの祭りであり、入所者が幼少の頃に体験した祭りと考える。この祭りは「あけぼのホーム」では2003年度より導入された。2003年度は更に、援護協会内の他の老人施設と合同運動会が実施された。以前はこのような取り組みは無く、これらはJICAボランティアの介護福祉士が専門的な立場から提案し、取り入れられた行事である。これらはブラジルに生活する日系人高齢者にとって、馴染みの行事なのである。

表.1 あけぼのホーム 日勤業務表 注

時間	業務内容
6:00	夜勤からの引継ぎ、ミーティング
6:05	起床の介助、失禁のチェックと交換
6:45	ベッドメイキング、食堂に移動
7:00	配膳、食事介助 (1部と2部に分かれて食事を摂る)
7:45	各居室へ移動
8:00	シャワー浴
9:30	シャワー浴以外の人のおムツ交換 衣類整理
10:30	昼食準備
11:00	昼食 (1部と2部に分かれて食事を摂る)
12:00	入れ歯洗浄 休憩 各居室で休憩
12:30	おむつ交換準備
13:30	おむつ交換
14:30	午後のおやつ
15:15	2号館に集合、TVなどを見る
	洗濯物片付け
16:30	夕食準備 移動
17:00	夕食 (1部と2部に分かれて食事を摂る) ベッドへの移乗介助
18:00	ミーティング、夜勤への引継ぎ
18:05	

注 : 筆者の調査した「あけぼのホーム」の業務表より

表.2 日勤業務表

時程	業務項目
AM 7:30	《早番》 起坐介助、配膳、食事介助、下膳、与薬、洗膳、 食後の始末、オシボリ始末
AM 8:30	排泄介護(オムツ交換など)、水分補給
AM 9:30	《日勤》 フロア申し送り、夜勤者からの夜間状況報告、 寮母日誌確認、日勤業務説明、消防設備点検簿記入
AM 9:40	全体申し送り、行事等説明、ラジオ体操
AM 9:50	給湯器点火、101～102・静養室・旧館廊下掃除、灰皿処理、 オムツ交換、便尿器処理、洗面所清掃、ベットメイキング、 体位変換、着替え介助
AM 10:00	髭剃り介護、ごみあけ、身体清拭、水分補給、 居室清掃(103～107)、 サイドテーブル・床頭台・廊下手すり拭き、清拭用オシボリ準備、 与薬準備、汚れ物、染み抜き処理、洗濯物整理配布、 排泄随時介護、検温、配茶
AM 11:30	食堂準備、食堂参加者移動介助、起坐位介助、軟菜準備、配膳
AM 12:00	食事介護、与薬介護、下膳、食堂より帰居介助 洗膳、明朝オシボリ準備、安全確認(見回り)
AM 12:30	休憩 ナースコール対応、要介護者随時対応
PM 1:30	オムツ交換、便尿器処理、洗面介助、うがい介助、義歯洗浄 牛乳・ヤクルト配布・介助、オムツ準備(搬送)
PM 2:30	離床介助(各種)、水分補給、体位変換、洗面所清掃、排泄介護、 配茶、くだもの介助
PM 3:30	洗濯物整理配布、居室・廊下清掃、配膳室準備
PM 4:00	ミーティング
PM 4:30	オムツ交換、便尿器処理、下剤必要者確認、ごみあけ、

PM 5:00	廊下ごみボックス処理、起坐介助 軟菜準備、日誌記入、配膳
PM 5:30	食事介助
PM 5:40	(遅番) 食事介助 下膳、与薬介助 洗膳、食器片付け、残菜整理
PM 6:30	

出典：東京都社会福祉協議会 老人福祉部会研修委員会・研修委員会指導員研修委員会編集  
『老人ホーム・生活指導員の手引き 業務編』p22 表4・日勤業務表 1994年

「あけぼのホーム」で行われている介護業務（表・1）と、日本で一般的に行われて来た介護の業務的日課（表・2）と比較してみると、日本の介護業務モデルをそのまま取り入れているとも見て取れる。実際、介護職員は日本の特別養護老人ホームと同じように忙しく立ち働いていた。

### 3. 「あけぼのホーム」の介護職員体制の特徴と課題

職員について、その職種は施設長、介護職、看護職、医師、理学療法士、作業療法士、調理、清掃、洗濯、設備管理などである。

施設長はじめ、その部署の責任者は日系人が担当している。なお、サンパウロ援護協会の高齢者施設の施設長は福祉の教育は受けておらず、他の職種から転職した職員である。

介護職員の数は、2003年8月現在の職員数は、看護師9名（管理看護師1名）、寮母（介護職員）12名。その内、主任とリーダーは日系人で日本語会話堪能であり、介護職員は女性のみであった。

勤務時間は基本的に、12時間勤務で、夜勤と日勤の入れ替わり制で行っている。日勤夜勤とも、勤務と休日を1日おきに繰り返すのが通常スタイルであり、一人の職員が数日間のサイクルで夜勤日勤を交互に行う勤務体制は取られていない。これは、ブラジルの労働基準法に準じた就労体制である。それにより入所者の生活に合わせた変則勤務が自由に行えない状況であるとのことであった（施設長談）。そのため「あけぼのホーム」では、リーダーの職員が定期的に夜勤を行い、夜勤職員に対する指導と監督をおこなっている。

介護に従事している大多数の職員は、日本のような制度が存在しないため、教育、訓練を受けていない日系人以外のブラジル人である。施設によっては自主的な研修を実施しているが、日本のような介護教育やヘルパー研修は制度化されていない。

介護業務の内容は既に、2. で述べた。その指導体制について詳しく述べたい。先にも上げたように介護職員は主任、リーダーと指導者が立てられている。それぞれの勤務体制

ごとのグループにリーダーが1人おり、日々の業務について責任を持って指導が行われている。リーダーは、日本国内で老人介護福祉施設、保健施設や療養型病床群での介護職員や、ホームヘルパーなどの経験をしている。その経験を活かし、介護福祉士を取得している者もいる。

介護記録、引継ぎ方法（ミーティングの方法と内容について）などの介護を全職員が共有し、継続した介護がなされるために不可欠ではあるが、ブラジルの状況、主に非識字率13.7%（『ブラジルを知るための55章』前掲書p191）では、文字を書くことが出来ない、読めない介護職員が存在することからすると、まだ、それらのことは今後十分な時間が必要であると思われる。

また、JICAからのボランティアを受け入れていることも取り上げたい。各高齢者の介護施設は介護福祉士などの資格を取得した介護福祉の専門家の派遣を要請し、派遣されたボランティアは教育、指導者としての役割を求められる。従って指導体制や、指導方法は、おのずと彼らが修得した日本の方法で行われる。しかしながら、言語によるコミュニケーションの不成立、日本との文化の相違による見解の相違などにより指導上の困難が生じるのも事実である。

実際の活動を見ると、写真.2、写真.3に見られるようなベッドサイドの安全な座り方（端座位）の説明図の作成による介護技術の指導、フェスタ・ジュニーナ、運動会などの行事の導入など困難な中でも一定の成果を上げている。2年間（延長も可能）のボランティア期間という限界はあるものの、今後の活躍に期待したい。

写真.2 「安全な端座位の方法」



写真.3 「安全な端座位の方法」(続き)



## おわりに

今回の調査では「あけぼのホーム」を取り挙げた。この調査によって次の様なことが解った。例えば、施設の構造上の問題、介護職員の教育が行われていないことがそれである。JICAの協力は充分とは言えないまでも、ブラジル社会の伝統的な行事の取り入れなど改善点も挙げられる。

「あけぼのホーム」は日系人社会の「介護」への期待を背負っている施設であることは、



今回筆者が行った現地調査のみならず、既に『日系社会高齢者実態調査』(前掲書)でも明らかである。今後、ますます高齢化が進行するブラジル日系人社会について養護老人ホームやその他の福祉施設について継続し作業を進めたい。

【引用・参考文献】

- サンパウロ日伯援護協会編著『援協四十年史』1999年  
移民80年祭典委員会・ブラジル日本文化協会編著『ブラジル日本移民八十年史』1996年  
ニッケイ新聞編著『ブラジル日本人移民20世紀のあゆみ』1997年  
池上重弘編著『ブラジル人と国際化する地域』明石書店 2001年  
北 杜夫著『輝ける碧き空の下で』新潮文庫 (平成2年)1990年  
アンジェロ・イシ著『ブラジルを知るための55章』明石書店 2001年  
サンパウロ日伯援護協会・日系社会高齢者実態調査委員会編『ブラジル日系人社会高齢者実態調査』サンパウロ日伯援護協会 2003年  
東京都社会福祉協議会 老人福祉部会研修委員会・研修委員会指導員研修委員会編集『老人ホーム・生活指導員の手引き 業務編』p22 表4・日勤業務表 1994年  
渡邊 薫著 静岡県立大学短期大学部研究紀要 14-2, 359-366, 2000年

(2004年2月24日受理)